

千葉の園芸

発行所 千葉市中央区市場町1-1
公益社団法人千葉県園芸協会
連絡先 043(223)3005
発行日 毎月1日
令和8年1月号



令和8年の新春を迎えて

公益社団法人千葉県園芸協会
理事長 江波戸一治

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

旧年中、会員の皆様には、当協会の業務運営、並びに本県園芸農業の発展に多大なる御尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本県は、温暖な気候と大消費地の首都圏に位置する恵まれた立地条件にあり、生産者の皆様の高い技術と、たゆまぬ努力に支えられ、全国屈指の園芸農業県として発展してまいりました。

しかしながら、ここ数年の地球温暖化による異常気象は、今まで培った生産技術の見直しを余儀なくし、品種の限界を超える暑さは、収穫量の不安定化をもたらすなど、今までに経験したことのない、急速な環境変化への対応が求められています。

加えて、産地の高齢化の進展など、直面する現状の課題も顕著になってきております。

今まさに、生産基盤の一層の強化や担い手の確保が急務であり、関係者が一丸となって、変わり行く情勢に対応しながら、首都圏における、責任産地としての役割を果たすことが求められています。

このため主力の野菜関係では、重点4品目を中心に産地連携事業を推進することにより、販売力と生産力を一層強化するとともに、各地域の主要品目を再度見直しながら、皆様と連携し、産地の維持発展に繋げてまいりたいと考えております。

果樹関係では、一昨年から実施している、梨ワンストップ窓口としての活動を継続とともに、各品目の共進会による生産技術向上と消費者へのPR、新品種や新技術導入への支援などを行ってまいります。

花き関係では、本県産の認知度と生産技術の向上を狙った「千葉県フラワーフェスティバル」の開催や、消費拡大に向けた花育活動などを行ってまいります。

植木、いちごに関しましては、同様に共進会や研修会などを各連合会の皆様とともに開催し、生産力の向上と消費拡大に努めてまいります。

また、課題となっている担い手の確保については、新規就農相談の窓口として、新たな就農希望者の確保に努めてまいります。

農地中間管理事業では、市町村や農業委員会等と協力し、地域計画に基づいて担い手への農地の集積・集約を進め、規模拡大による経営の安定化と農地の有効利用を図ります。

更に、6次産業化推進事業、野菜価格安定事業等各種事業を推進し、今後とも、生産者の皆様の経営安定と所得向上に努めてまいりますので、関係者の皆様には、より一層の御支援と御協力をお願い申し上げます。

本年が、皆様にとって素晴らしい年となることを祈念申し上げ、年頭の御挨拶とさせていただきます。



やまといも産地の維持・発展に向けて ～収穫作業機械化体系の開発と実演会の開催～

千葉県農林水産部 手支援課
専門普及指導室 上席普及指導員 石丸 洋次

千葉県農林総合研究センターでは、やまといもの収穫作業機械化体系の開発を行いました。手支援課では、千葉県農林総合研究センターと連携の下、実演会を開催しました。開発された技術は、収穫作業体系が改善されることから規模拡大に繋がることが期待されます。

1. はじめに

千葉県のやまといも栽培は、昭和15年に佐倉市で始まりました。昭和30~40年代にかけて北総台地を中心に各地で産地が形成されました。(※出典:「千葉県野菜園芸発達史」)

主要産地として、JA千葉みらい佐倉大和芋部会、JAかとり多古町園芸部大和芋部会・栗源園芸部大和芋部会、JAちばみどり干潟大和芋部会があり、全国有数の生産量を誇ります。

歴史ある千葉県のやまといも栽培ですが、生産者の高齢化等により、産地の維持・発展を目指すには、個々の経営体の規模拡大や新たな担い手の確保等を図る必要があります。

2. 収穫作業における産地の課題

現行の収穫作業は、トラクタがけん引するプラウで収穫物を掘り起こす方式が主流です。この方式は、プラウが切った溝に収穫物が沈み込んでしまうため手作業で土中から掘り出す必要があります。腰を屈めての重労働であることから、規模拡大等を図る上で、収穫作業体系の改善が課題となります。

3. 収穫作業機械化体系の開発

産地からの改善の要望に応えるべく、千葉県農林総合研究センター水稻・畠地園芸研究所 畠地利用研究室は、令和4~6年度にかけて、農業機械技術クラスターの事業を活用し、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構及び農業機械メーカーと共に、やまといもの収穫作業機械化体系(以下、「機械化体系」)の開発に取り組みました。

多古町の生産者の協力の下、試行錯誤の末、掘取機を開発しました。25馬力程度のトラクタで作業が可能であり、地表に収穫物を整列させて掘り上げることができます(図1)。また、いも類収穫機のアタッチメントを改良し、掘り上げた収穫物を拾い上げ、コンテナ収容が可能となる機械化体系を開発しました(図2)。

新たな堀取機といも類収穫機を組み合わせることで慣行の収穫体系のように中腰姿勢で土中から収穫物を掘り出して、拾い上げる必要がなくなります。



図1 新しい掘取機で掘り上げられたやまといもが地表に整列する様子(点線枠の中)

4. 収穫作業機械化体系の実演会の開催

開発された機械化体系について、県内産地に広く周知を図るため、生産者及び関係機関向けに実演会を開催する運びになりました。

畠地利用研究室の研究場において、令和7年12月2日に実演会を開催し、県内やまといも生産者及び関係機関から35名の参加がありました。

参加者は、「作業性が改善されて軽労化につながる」等、積極的に意見交換がなされました。



図2 いも類収穫機による拾い上げ作業の実演の様子

5. 今後に向けて

開発された機械化体系について、各産地での実演会の開催や現地実証を通して、技術の普及を目指します。実証データは協議会等の産地間で情報共有を図り、やまといも産地の活性化に繋げていきます。



葉ネギの水耕栽培における高温対策技術

千葉県農林総合研究センター
野菜研究室 研究員 大里 俊一朗

高温期の葉ネギの水耕栽培では、温室内の気温 38°C以下、培養液温度 25°C以下を目標に管理し、原水の EC 値（電気伝導度）が高い場合、培養液の EC 値はより低濃度とすることで収量低下を軽減できます。低成本な培養液の冷却には、井戸水の活用がお勧めです。

1. はじめに

近年の地球温暖化の影響により、葉ネギの水耕栽培では、夏期の高温による生育不良が問題となっています。そこで、葉ネギ栽培における高温対策技術について、気温や培養液温度、培養液 EC 値の観点から栽培時の限界や目標値について検討しました。

2. 気温について

高気温が葉ネギの生育に及ぼす影響について日中の気温 30°C~40°Cの間で検討したところ、気温 38°Cまでは生育への影響は少ないですが、気温 40°Cでは根傷みの発生や生育の停滞が著しく、収穫時茎葉部重が約3割減少しました。このことから、葉ネギの水耕栽培では気温 38°C以下を目標にすべきと考えられます。

3. 培養液 ECについて

原水の EC が高い条件(1.2dS/m)において、培養液 EC 値が生育に及ぼす影響について検討しました。慣行区（培養液 EC4.3dS/m）の収穫時茎葉部重と比較して、高濃度区（培養液 EC5.5dS/m）は約4割減少、低濃度区（培養液 EC3.4dS/m）は約8割増加しました。低濃度区では根傷みの発生が少なく、根部乾物重は慣行区より約9割重かったことから、養水分の吸収に対する悪影響を抑えられたと推察されます。このことから、原水が高 EC でかつ高温環境においては、より低濃度での管理をすべきと考えられます（表1）。

表1 培養液 EC の違いが葉ネギの生育に及ぼす影響

	個体数 (本/株)	茎葉部 (cm)	根部 (g)	茎葉部 (g)	根部 (g)	栽培期間 (日)
慣行区	6.5	49.2	28.5	4.4	4.15	0.24
養液低濃度区	6.3	55.3	52.6	7.9	5.73	0.45
養液高濃度区	4.2	44.7	16.0	3.7	3.15	0.22

注1) 令和5年7月3日定植、品種「ジャワ夏葱」、

栽培期間中平均気温 33.2°C

2) 調査日：令和5年9月11日、播種：1株 15粒

3) 培養液：原水 EC1.2 dS/m、OAT-A 処方、

栽培期間中の平均 EC 慣行区 4.3dS/m、養液低濃度区 3.4dS/m、
養液高濃度区 5.5dS/m、栽培期間中培養液平均温度 32.1°C

4. 培養液温度について

培養液の温度の違いが生育に及ぼす影響について検討したところ、培養液温度 25°Cは 30°Cと比較して生育の進行が早く、収穫時茎葉部重は約 1.2 倍増加したことから、温度は下げることが効果的です。

水耕栽培において、低成本で培養液の温度を下げる方法として井戸水の活用があります。湛液型水耕の栽培ベンチ内に井戸水を通水した管（ポリ塩化ビニル製のホース、流量 0.5L/m²・分）を設置し、冷却効果を検証したところ、井戸水による冷却区の培養液平均温度は 26°Cとなり、冷却しない対照区より 6°C低下しました。冷却区の収量は対照区に比べ 1.15 倍多く、収穫までの期間は 8 日早くなりました（表2）。

表2 培養液冷却の有無が葉ネギの生育に及ぼす影響

	個体数 (本)	茎葉部 (cm)	根部 (g)	茎葉部 (g)	根部 (g)	栽培期間 (日)
対照区	10.8	51.2	41.0	5.3	5.19	0.53
培養液冷却区	10.5	52.3	46.8	10.0	5.02	0.62

注1) 令和6年7月12日定植、品種「ジャワ夏葱」

2) 培養液：原水 EC0.5dS/m、OAT-A 処方、

栽培期間中の平均 EC2.5dS/m

3) 総培養液量 500L/区、井戸水通水量 : 810L/ m²・日

5. おわりに

以上の結果から、高温環境下においても、気温及び培養液濃度の適切な管理に加え、井戸水を活用した培養液の冷却により、葉ネギの安定生産が期待できると考えられます。本試験の詳細については千葉県の試験研究成果普及情報や成果発表会動画でも確認できますので、千葉県ホームページを御参照ください。

成果普及情報（県HP内）

<https://www.pref.chiba.lg.jp/ninaite/shikenkenkyuu/documents/r6n12.pdf>





ビワの改植時における「盛土式客土法」の開発

千葉県農林総合センター 暖地園芸研究所
特産果樹研究室 研究員 中後 貴寛

ビワの改植時に盛土部分のみをビワ栽培歴のない土(70L)で客土することで、初期の樹体生育が良好になります。その結果、枝の発生が多くなり、初期収量が増加します。

1. はじめに

ビワ产地の多くのほ場では、長年にわたって栽培が続けられており、改植した苗木の生育が不良になることが少なくありません。このような連作による障害を回避するためには、植え穴部分の土壤(約470L)をビワ栽培歴のない新しい土(以下、新土)で客土する方法が有効です。しかし、この方法は重機で植穴を掘る作業が必要であり、普及は限定的です。

そこで、簡易で実践的な方法として、盛土部分のみを新土(70L)で客土する盛土式客土法(図1)を考案し、その効果を検証しましたので、紹介します。



図1 盛土式客土法のイメージ

2. 施設栽培における盛土式客土法

施設ほ場において、「富房」1年生苗木を盛土式客土法で定植した結果、連作土盛土区と比較して、1年後の枝数や幹周等の生育が良好となりました(図2)。さらに、「富房」2年生苗木を同様に盛土式客土法で定植した試験では、連作土盛土区と比較して、定植翌年以降の3年間の合計収量が多くなる傾向がみられました。なお、収穫日や果実品質に差はみられませんでした。

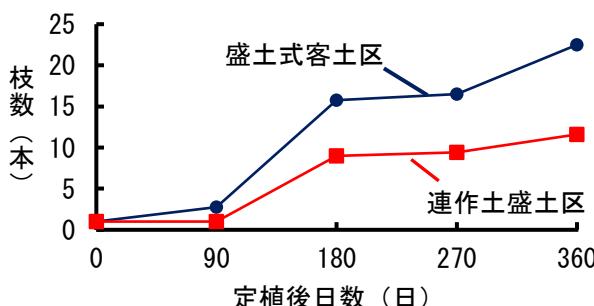


図2 盛土式客土法が施設ビワ「富房」の枝数に及ぼす影響(平成30~31年)

注1) 1区1樹4反復の平均値を示した
2) 平成30年2月10日に定植

3. 露地栽培における盛土式客土法

「大房」2年生苗木を定植した露地ほ場の試験でも、盛土式客土法により、3年後の枝数や幹周等で生育が良好となりました。また、盛土に使用する新土は、市販の赤玉土や赤土を同量の割合で混和した土(以下、混和土)にした場合も、同様の効果がみられました(写真1)。



写真1 混和土を用いた盛土式客土による露地
ビワ「大房」の生育の様子
(左: 連作土盛土区、右: 盛土式客土区)

注1) 平成30年3月7日に定植

2) 平成31年1月(定植10か月後)時点の各試験区の代表樹

4. 留意点

これらの結果から、盛土式客土法で改植をすることにより、初期の樹体生育が良好となることが明らかとなりました。その結果、枝の発生が多く、生育が早く良好となるため、初期収量が増加します。また、用いる土壤は、1樹当たり約70Lで済むことから、モノレール等での運搬が可能であり、部分的な改植にも活用できます。

留意点として、効果を安定させるため、盛土の全量を新土とすること、新土には、水はけが栽植ほ場に近いものを選ぶことが挙げられます。また、幼木は乾燥に弱いため、植え付け後に降雨が少ない場合には、適宜かん水を行うことや、株元に敷きわらをして土壤の乾燥を防ぐことも重要です。



房総ジビエフェア2026を開催します！

千葉県農林水産部農地・農村振興課

千葉県では、野生鳥獣対策の一環として、県内で捕獲され、県内の食肉処理加工施設で適切に処理・加工されたイノシシやシカの肉を「房総ジビエ」と銘打ち、消費拡大を図っています。

この度、房総ジビエのおいしさを多くの皆様に味わっていただき、更なる房総ジビエの消費拡大を図るため、「房総ジビエフェア2026」を開催します。

フェア参加店舗では、2月1日に開催される「第8回房総ジビエコンテスト」出品作品をはじめ、多彩な房総ジビエを使用した加工食品や料理が提供・販売されます。

また、フェア期間中、参加店舗で房総ジビエの料理や商品を注文・購入した方の中から抽選で県産品等が当たるプレゼント企画を実施します。この機会に、是非房総ジビエを御賞味ください。

参加店舗の詳細等については、下記のURL又は二次元コードから「房総ジビエ特設サイト」にアクセスして御覧いただけます。

【期間】

令和8年2月1日(日)～3月3日(火)

【問合せ先】

千葉県農林水産部農地・農村振興課

電話043-223-2963

詳細については、「房総ジビエ」で検索！

URL: <https://bosogibier.com>



【房総ジビエコンテスト 加工食品部門 前回受賞作品】



千葉県知事賞

「千房総食彩 Pizza～ragu di cinghiale～」
ピッツェリア ポジターノ（成田市）



千葉県農林水産部長賞

「渓谷ジビエのキーマカレーパン」
サトモノ屋（市原市）

催物結果



“房総みかん美味コンテスト”開催結果

千葉県農林水産部生産振興課園芸振興室

11月22日（土）・23日（日）に「房総みかん美味コンテスト」を開催しました。「温州みかん」「ゆず」「レモン」の71点の出品がありました。1日目は千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所において専門家による厳正な審査を行い、特別賞14点、奨励賞9点を決定しました。2日目は消費宣伝として、道の駅富楽里とみやまにおいて特別賞の展示と出品物の販売を行いました。

コンテストに出品された選りすぐりの「温州みかん」は、糖度が高く品質も良いものでした。「ゆず」及び「レモン」についても、外観に優れ、消費者の皆さんに房総のかんきつを知っていただく良い機会となりました。

賞名	所属組合名	氏名	品目
千葉県知事賞	三芳柑橘組合	佐久間直治	温州みかん
千葉県農林総合研究センター長賞	三芳柑橘組合	高橋友紀子	温州みかん
千葉県安房農業事務所長賞	千倉柑橘組合	安田義昭	レモン



千葉県知事賞受賞品



特別賞展示・販売



第74回関東東海花の展覧会の開催

千葉県農林水産部生産振興課園芸振興室

関東東海花の展覧会は、千葉県を含む関東東海1都11県の生産者が育てた自慢の切花や鉢花など約1,900点が集まる、日本で最大規模の伝統ある花の展覧会です。千葉県からは、約200点が出品予定です。是非御来場ください。

1. 主催

第74回関東東海花の展覧会
【構成団体:関東東海1都11県及び全国花き関連6団体】

2. 会期（一般公開・入場無料）

令和8年1月30日（金）～2月1日（日）

【公開時間】

1月30日（金）10:30～15:30（最終入場15:00）
1月31日（土）10:00～18:00（最終入場17:30）
2月1日（日）10:00～16:00（最終入場15:30）※

※ 出品物即売会は最終日の13時～16時のみ

※ 2月1日の即売会の入場には整理券が必要となります。
整理券は当日の午前9時から配布します

4. 内容

花き品評会、フラワーデザインコンテスト、花の装飾展示、園芸教室（フラワーアレンジメント教室等）、出品物即売会 など



会場の様子（第73回）

3. 会場

サンシャインシティ文化会館ビル
2階 展示ホールD
(東京都豊島区東池袋3-1-4)

問合せ

千葉県農林水産部生産振興課園芸振興室
電話 043-223-2871

募集案内



令和8年度農業機械研修生募集

千葉県立農業大学校

千葉県立農業大学校では、各種農業機械の安全な取扱いについて研修を行っています。また、大型特殊自動車免許（農耕車限定）やけん引自動車免許（農耕車限定）、農業機械士の資格を取得するための研修も行っています。いずれも、研修開催時期の約2か月前に研修の応募を受付けています。くわしくは、「農業機械研修募集案内」または農業大学校HP（下記QRコード）で研修日程を確認の上お申し込みください。いずれの研修も年度後半になりますと応募者が多くなりますので、早い時期の応募をお願いします。

研修名	開催時期	研修の内容
農業機械体験研修	4、11月	農業機械操作の初心者向け研修
けん引体験研修	5月、12月	けん引操作の初心者向け研修
トラクター免許取得研修	5、6、11、12月	大型特殊自動車運転免許の取得
けん引免許取得研修	7、3月	けん引自動車運転免許の取得
農業機械士育成研修	5、10月	農業機械士の資格取得
農業後継者育成農業機械研修	6、11月	農業機械操作の初心者向け研修
農業用ドローン操作研修	12月	ドローンの初心者向け研修

申込先：千葉県立農業大学校機械化研修科
(送付先) 〒266-0006 千葉市緑区大膳野町1055
電話：043-291-1254 FAX：043-292-3859
ホームページ <http://www.pref.chiba.lg.jp/noudai/>
メールアドレス：kikaikenshu@mz.pref.chiba.lg.jp



ホームページ